

（様式6-A） A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

八木 久子 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Severity scales of non-IgE-mediated gastrointestinal food allergies
in neonates and infants

（新生児乳児消化管アレルギーの重症度評価）

Allergology International 68 : 178-184, 2019

Hisako Yagi, Takumi Takizawa, Koichiro Sato, Takaharu Inoue,

Yutaka Nishida, Takashi Ishige, Maiko Tatsuki, Reiko Hatori,

Yasuko Kobayashi, Yoshiyuki Yamada, Hirokazu Arakawa

論文の要旨及び判定理由

新生児乳児消化管アレルギーは、新生児期から乳児期において、主に牛乳が原因で消化器症状を呈する疾患の総称で、非IgE依存性食物アレルギーと考えられている。本疾患は、少量の血便にとどまる症例から、敗血症様症状やショックなどの全身症状を呈する症例まで、幅広い症状スペクトラムを有する疾患である。しかしながら、これまで治療や管理のための重症度分類は存在しなかった。本研究では消化管症状に加え、全身症状の有無に着目した重症度分類を考案し、自験例17症例について、その重症度と検査値や内視鏡所見、治療反応性、予後との関連を検討した。重症例は炎症所見が強く、低蛋白血症や、好中球および血小板数の増加、貧血がみられた。リンパ球幼弱化試験では、重症群は全例、牛乳抗原のコンポーネントによる刺激で陽性を示した。大腸内視鏡検査では、重症度が高いほどより広範囲に炎症所見を認め、重症例では好酸球以外の炎症細胞浸潤がみられた。また重症群では全例で高度加水分解乳またはアミノ酸乳のみの栄養法への変更を必要とし、耐性獲得の時期も遅かった。この研究は、新生児乳児消化管アレルギーの重症度が検査値、内視鏡所見と強く相関し、本疾患患者の適切な対応や治療の選択、ならびに予後予測に関する新たな知見と認められ、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

（令和 2年 1月27日）

審査委員

主査	群馬大学教授（医学系研究科） 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野担任	近松 一朗 印
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 法医学分野担任	小湊 慶彦 印
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 内分泌代謝内科学分野担任	山田 正信 印

参考論文

1. Interleukin 2 receptor- α expression after lymphocyte stimulation for non-IgE-mediated gastrointestinal food allergies

(新生児乳児消化管アレルギー診断におけるインターロイキン2受容体 α 発現の検討)

Allergology International (in press)

Yagi H, Takizawa T, Sato K, Inoue T, Nishida Y, Yamada S, Ishige T, Hatori R, Inoue T, Yamada Y, Arakawa H

2. Endoscopic findings in the acute phase of food protein-induced enterocolitis syndrome

(急性期に内視鏡検査を施行したショック症状を伴う Food Protein-Induced Enterocolitis Syndrome の乳児例)

Pediatr Allergy Immunol 26 : 90-91, 2015

Ishige T, Yagi H, Tatsuki M, Hatori R, Nishida Y, Takizawa T, Arakawa H

最終試験の結果の要旨

新生児乳児消化管アレルギーの本研究における重症度分類の有用性について試問し、満足すべき解答を得た。

非IgE依存性食物アレルギーの診断と治療について試問し、満足すべき解答を得た。

(令和 2年 1月27日)

試験委員

群馬大学教授 (医学系研究科)

小児科学分野担任

石崎 泰樹

印

群馬大学教授 (医学系研究科)

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野担任

近松 一朗

印

試験科目

主専攻分野

小児科学

A

副専攻分野

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

A